

2021. 11. 17 (水)

共感と許し合い

Hans Peter Liederbach

無慈悲、憤り、怒り、わめき、そしりなどすべてを、一切の悪意と一緒に捨てなさい。互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストによってあなたがたを赦してくださったように、赦し合いなさい。

(エフェソの信徒への手紙 4章 31-32節)

はじめに

今月のチャペルの共通テーマは「共感する力」です。先ほど打樋先生がご朗読くださった聖書の言葉においては、その力が「許すこと」または「許し合うこと」に表現されると言われています。これから、共感と許し合いの関係について一緒に考えていきたいと思えます。

ドイツ出身の私は日本語話者ではないため、辞書を使うことが多いです。発表原稿を作成したとき、「共感」という言葉を『広辞苑』で引きました。そこにいろいろな意味が出ていますが、英語のシンパシー、エンパシーなども出ています。さらには、感情移入という意味も挙げられており、共感の一つの意味合いは感情移入だということが分かります。

どうやって他者の気持ちがわかるのか？——感情移入の問題

共感する、つまり今言った意味において、感情移入の形で共感することは果たして可能なのか、それは少し引っ掛かったところです。というのも、常識的に考えれば、感情や気持ちなど、そのようなことは最もプライベートなものですし、私的なもの、心の中にある、頭の中にある、体のどこか分かりませんけれども、とりわけ感情というものはある意味で内面的なものです。他者の感情を感じる、それは共感の意味です。他者が感じることをそのまま、あるいは同じように感ずるとも広辞苑に書いています。

しかし、他者の心の中にある感情は、いかに接することができるのか。言うまでもなく、そのまま他者の心の中をのぞくことはできません。そうであるならば、共感はできないのではないかと、言う結論になるでしょう。しかし、この問題提起が最初から間違っていると思われず、なぜなら、自分が他者

の心にどのように接することができるのか、という問い方を前提にしているのはいわゆる自我論であり、この自我論はさまざまな問題を引き起こす理論だからです。

自我を知ることと他者を知ること ——自我論と経験論

例えば17世紀フランスの哲学者デカルトの例を見てみましょう。皆さんはデカルトの名前を聞いたことがあると思います。デカルトの言葉「われ思う、故にわれあり、われ存する」はとても有名です。デカルトが考えているように、自我というものは、カプセルのようなものです。つまり閉ざされている実体です。その中に感情が起きたり、思考などが行われます。デアカルトによれば、こうした実体的な自我は真理獲得のために必要不可欠なのです。しかし、自我とは外からのぞけないカプセルであるならば、そのカプセルをいかに出ることができ、同じくカプセルたる他者を知ることができるのだろうか、という問題が生じます。

「他者の心の中にある感情は、いかに接することができるのか」という問題提起はデカルトの自我論から発生するものです。この問題提起に大きな疑問符を付けなければならぬと思った、いわゆる経験論者がいます。例えば、18世紀に活躍したイギリスの哲学者のD. ヒュームおよびA. スミスを挙げましょう。後者は経済学者として知られているが、元々は道徳論を書いた人です。ヒュームとスミスによれば、自我とはカプセルではなく、感覚を通して環境へと開かれているものだとして主張し、共感するとは、語感と同様、人間のいわば生まれつきの能力だと考えていま

した。つまり、彼らによれば、共感という人間のキャパシティがあるからこそ道徳感情のようなものが生じ得ます。

しかし、今日の聖書の言葉の前後を見ますと、共感する、許し合うことは明らかに生まれつきのものではないようです。それは却って獲得されたものです。自分を練達させることによって、共感というキャパシティを育むことができます。そのため、ある意味での改心が必要かもしれません。エフェソの信徒たちへの手紙の中には、古い人間と新しい人間の話があります。つまり古い人間は憤りや怒り、無慈悲など、そのような感情に支配されている人間です。イエスが求めているのはそれを捨てるということです。そうすると許し合うことが可能になります。さらに、共感の具体的な発生を理解できるための鍵は「愛」に潜んでいます。

愛、共感、許し

ヘーゲルというドイツの哲学者が愛について語りました。ヘーゲルが言うように、愛とは、自分が他者の中において認められることです。一方通行ではないので、自分と他者が互いに認め合うことです。夫婦愛はそうだし、友人愛も同様です。しかも、他者を認めることが愛であるならば、愛する他者を変えようとし、支配し、自分のものにするなどのような振る舞いは最初から論外です。支配関係のもとでは、愛が発生しない。相互承認がなければ愛は減びてしまうわけです。

ヘーゲルの愛について話をとりあげ、自我論や経験論からかなり距離を置きました。他者において、他者に認められたものとして自分を見出すことによって、初めて共感のよう

なものが発生すると考えられます。そこには逆説的な自他関係が働いています。というのも、愛においては、ある意味での一体感があるものの、それと同時に他者そのものを認める働きもあるからです。難解な関係ですが、他者がなければ真の自分もない、これが愛の働き方です。つまり、私が自分自身を実現するために、私を認めてくれる他者の存在が必要不可欠です。このような、愛としての自分と他者との相互関係には、はじめて共感が生じ、許し合うことが可能となる、と言えましょう。

いわゆる許し難い・許せないことは沢山あります。妻または夫に不倫される、友人に裏切られるとき、「絶対許せない」と人は言います。それはとても自然な反応です。なぜ許さなければならないのか。しかし、許すというのは罪を良しとすることではありません。ただ、他者を憎まない、ということの意味なのです。それは聖書の言葉にもあるように、憤りを捨てなさいという意味です。その

ため、私に傷をつけた他者を愛しなければならぬ、とイエスが求めます。いわゆる「敵を愛すること」です。

ちなみに、日本語の「許す」はドイツ語で *vergeben* といいますが、その語には何かを放棄するという意味が含まれています。まさに自らの憤りを放棄するというのはこの意味での「許す」です。しかも、先述の自分と他者との相互関係だからこそそれは可能です。というのも、他者の、そして自分自身のはかなさ、不完全さを共感することができるからです。このような意味において、共感と許し合いがつながっていると思われます。

敵を愛し、他者を許すといったことが極めて難しいとは言うまでもありません。エフェソの信徒たちへの手紙を書いたパウロもそれをよく知っていたはずで、それゆえ、「古い人間をやめ、新しい人間になれ」と彼がわれわれに求めています。ご清聴ありがとうございました。

(社会学部教授)